

絵本『ビキニの海のねがい』ができるまで

アメリカのビキニ水爆実験

アメリカは1946年から58年まで、太平洋中西部のマーシャル諸島で67回もの核実験を行いました。同島ビキニ環礁で54年3月1日に炸裂させた水爆「ブラボー」は、広島型原爆の約1000倍の破壊力でした。砕けたサンゴの粉じんは、「死の灰」(放射性降下物)となって海や島々に降り積もりました。がんや甲状腺異常、死産や先天的に障害を持つ子どもが生まれるなどの被害が現れています。いくつかの環礁では島に戻ることができません。

2010年7月、ユネスコ(国連教育科学文化機関)は、「平和な地上の楽園」というイメージとは裏腹に、人類が核の時代に入ったことを象徴している」として、ビキニ環礁を世界遺産に登録しました。多くの日本漁船が被災した、この「ビキニ事件」をきっかけに核実験中止と原水爆禁止を求める国民的運動が起こり、今日まで続く原水爆禁止運動の原点になっています。

水爆実験を描いた絵



1954年3月1日に、アメリカは太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で水爆実験を行いました。日本のマグロ漁船が遭遇した「ビキニ事件」です。のべ992隻のマグロ漁船が被災し、多くの漁船員や現地の島民が被災しました。しかし、第五福竜丸以外の船の被災は隠され、無かったことにされてきました。

事件から31年後の1985年、高知県内で学習活動をすすめる幡多高校生ゼミナールの高校生と教師たちが、県内のマグロ漁船が被災していたことを知り、調査を始めました。マグロ漁船の船員の聞き取りなどの調査活動を進めるうちに、沈黙していた元船員が、被災者の状況や仲間の船員が若くして亡くなったこと

本にする会 森田敏恵さん

70年前にビキニの海で行われた水爆実験では、静岡県の第五福竜丸だけではなく、高知県のマグロ漁船も被ばくしました。この事実を無きものとせず、平和への願いを伝えたい。今年3月、高知県で絵本『ビキニの海のねがい』が出版されました。もとは紙芝居だった作品を本にしようと取り組んだ、紙芝居「ビキニの海のねがい」を本にする会の、森田敏恵さんに思いを書いてもらいました。

事件から31年後



『ビキニの海のねがい』(森田敏恵/絵、紙芝居「ビキニの海のねがい」を本にする会/文、税抜き2273円、南の風社。購入は同社のホームページから)

証言と絵が核の理不尽さを訴える



高校生がマグロ漁船の被災について調査する絵(挿絵はいずれも絵本『ビキニの海のねがい』から、紙芝居「ビキニの海のねがい」を本にする会提供)

元小学校教員の橋田早苗さんは、このビキニ事件の事実を子どもたちに伝えるために、紙芝居の制作を仲間呼びかけ、2019年に紙芝居「ビキニの海のねがい」を作りました。

何かとてつもないことが起きていと感じながらも、「死の灰」を浴びながら何時間もはえ縄の回収作業を行ったこと。放射能に汚染されているとは知らずに、雨水をシャワー代わりに体を洗ったり、釣ったマグロを内臓まで食べたこと。被災したことを誰にも話すことができない苦し

み。仲間の漁師が死んでいくなかで、「次は自分かもしれない」という不安…。

元船員の証言と、高知市の洋画家・森本忠彦さんの迫力ある絵で構成された紙芝居は、核兵器の恐ろしさ、被害を受けても家族にも話すことができなかつた理不尽さを訴えかけています。そして、隠されてきたアメリカの核開発を浮き彫りにしました。紙芝居は最後に「核のない世界を心から

